

第4回 公開対談「本願寺茶房」

「真宗の儀礼を語る 真宗と死者」(要約)

対談 亭主：天岸浄圓師 客人：蒲池勢至師

今回の茶房のテーマは「真宗と死者」。このテーマに設定した理由には、「先祖は死んでしまった」、「死や死者は目の前にあり、往生した人であるとは言い切れない」という蒲池勢至さん（客人：民俗学者）の「現場での実感」が背景にある。蒲池氏は、現代において、亡くなられた人を前にしてどのように儀礼を執行すべきか、儀礼にはどのような意義があるのか、浄土真宗において死や死者をどう位置づけているのか、と問い掛ける。

蒲池氏の問い掛けを受け天岸浄圓さん（亭主）は、死者を安易に「浄土に往生した方」と位置づけていくことを「癖」と否定的に捉え、死者に関わる儀礼をどのように執行していくべきか、遺族の苦しみや悲しみをどう受けとめていくべきか、という点から蒲池氏に答えていく。

両氏は、まず「儀礼」の意義に注目する。お二人ともに、初参式やお宮参りなどの通過儀礼の基本的な意味を、「儀礼を通して新しい位置づけを得る、新たな場所や立場へと移行していく、新たな意義を作り上げていく」とする。その上で天岸氏は、浄土真宗における葬送儀礼に対し、「往生につなげていく儀礼」という意味を指摘する。ここには、遺族が「死者を往生した方と見ていく視点」と遺族自身が「自分もこれから往生していく者である」という意識へと転換していくという2つの意味があり、天岸氏はこの「意識の転換」を促すことに儀礼の意味を見出す。

蒲池氏は、天岸氏の指摘を受け、日本では古くから亡くなられた方を「ほとけ」と見ていたのではないかと、その視点が葬送儀礼を成立させていたのではないかと問う。この問いを受けて両者は「言葉」の問題に注目していく。蒲池氏は「現場での実感」を背景に、「往生」という言葉が持っている意味が十分には理解しづらくなり、人々には受け入れがたくなっていること、それ以上に「往生」は死語になっていること、「死」を前にする人に対して「往生」という言葉を使う危険性を指摘する。これに対して天岸氏は、一般の人々が「死」と表現している事態を「往生」と表現することの重要性から応答していく。天岸氏は、「死という言葉がもっている限界に往生という新しい言葉をかぶせる」ことにおいて、「まったく違う」意義や意味が生まれてくるという。しかし、「まったく違う」意義や意味を生み出すからこそ「言葉」の使い方には細心の注意が必要であることも天岸氏は指摘している。

天岸氏と蒲池氏は、最後に儀礼と浄土真宗の教義との関係に話を移す。浄土真宗で示される安心門・起行門との関係である。

天岸氏は、安心門とは「阿弥陀仏を中心に人生を受けとめること」と意義づけ、それはそのまま「阿弥陀仏を拝むことに重要な意味を見出すこと」をも意味するという。つまり、信心が獲得される、私たちの往生成仏が間違いないと信じることができると（安心門）は、そのまま阿弥陀仏中心の生活が成立していることを意味しているとするのである。この「阿弥陀仏中心の生活」が起行門である。これを天岸氏は、法然聖人以来の助業（読誦・観察・礼拝・讃歎供養）の理解から説明される。天岸氏は、こうした起行門を表した説き方は、親鸞聖人においては『ご消息』など数カ所に見られるのみであるが、そうしたところから儀礼や実践の意味をくみ取っていくことが重要ではないかと指摘される。